

TOPICS 今号のトピックス

- 毎日放送・ラジオドラマ『鉄になる日』公開セミナー実施
- 公開セミナー 第33回名作の舞台裏「なぜ君は絶望と闘えたのか」
- 「市川森一・上映展示会 ～夢の軌跡～」開催
- 出前授業を開催 & B L・クリエイター支援サービス番組を追加
- 「向こう5年間の放送番組センター事業方針」が第1回臨時理事会で決定

■毎日放送・ラジオドラマ『鉄になる日』公開セミナー実施

■公開セミナー ラジオを楽しむ! スタート

今年度より、ラジオ番組を取り上げる公開セミナー「ラジオを楽しむ!」をスタートした。東日本大震災以降“ラジオの力”が見直されている。ラジオ番組だからこそ出来る事、またその魅力を伝えていく。12月8日に開催した第1回は、毎日放送のラジオドラマ『鉄になる日』(2011.11.21放送)を取り上げた。小松左京原作の長編小説『日本アパッチ族』を脚色・演出したこの作品は、ラジオドラマの可能性を再発見させた作品として、芸術祭ラジオ



部門大賞、ギャラクシー賞ラジオ部門大賞、ABU賞ラジオドラマ部門最優秀賞など数々の賞を受賞し、ラジオドラマ史上に残る名作となった。

セミナーでは、『鉄になる日』を鑑賞後、構成・演出、音響を担当した制作スタッフが、ラジオ番組作りの苦労、音へのこだわりなどを語った。

[登壇者] 島 修一(構成・演出/毎日放送)

小池 佑治(音響技術)、濱谷光太郎(音響効果)

[司会] 石井 彰 (放送作家)

「鉄になる日」誕生のきっかけ

『鉄になる日』の放送がきっかけで、絶版になっていた原作の『日本アパッチ族』が復刊された。「原作も読んで、原作の良さも感じて頂きたいし、原作からどうこのドラマが変わっているのかというのを楽しんで頂きたい。」と石井氏。島氏は「長編大作を1時間のラジオドラマにするために、魅力的なシーンをどんどん落としていかなければならない作業が一番大変だった。」数



島 修一

ある小松作品の中でも『日本アパッチ族』を選んだ理由は「作品のテーマ性が現代に通用するものだったという事と、大阪が舞台になっている事が大きいですね。大阪の局が制作するので、大阪らしい面白さとか、地域性みたいなものが出た方が面白いだろうと思った。こういうテーマ性と内容があって、しかもラジオでないと表現出来ない物語だなという気持ちがあったので、小松さんが、お亡くなりになる前の年からこの企画を出し続けていました。」と語った。但し、ラジオドラマはスポンサーが付く事がなかなかないので、企画にゴーサインが出るのには時間がかかるという。

ラジオドラマの魅力とは?

番組鑑賞の前に、司会の石井氏が、ラジオドラマについての解説を行った。「今のラジオ番組は生、ワイド、パーソナリティーの番組がほとんどだが、ラジオ放送が始まった1950～60年代は、ラジオドラマを始め、多種多様な番組がラジオから流れていた。ラジオドラマは今では、すっかり少なくなりました。今の、学生たち



石井 彰

ちにラジオドラマを聞かせると「疲れる」と言う。それは彼らが、場面を想像することに慣れていないから。主人公はどんな人か、どんな場面なのか、情景を思い浮かべることが出来ない。これは生まれつき、映像のあるテレビで育った若い人たちに共通する傾向。今の若者が好んで聞く歌の多くは、気持ちも伝える言葉ばかりで、情景描写がほとんどない。携帯小説など会話で成り立っている。」

情景を想像する耳のトレーニングとして石井氏が用意した、山形放送制作の『録音風物誌・雪国』を鑑賞。音声と想像でまざまざと情景が浮かぶのを確認する試みを行った。

音作りの苦労

この作品の魅力となっている様々な効果音。現実にはない“鉄を食べる音”について、濱谷氏は「鉄を食べると台本に書いてあるのを見て、これは面白いなと思った。鉄を食べるという音を一度分解します。まず歯に当たる音。実際に、鉄を食べてみたら最初に歯に当たったんです。これは本当に鉄をコツンと叩いた音を使いました。次に噛み込む時の音。これはせんべいなんです。おにぎり、せんべいとか色々試してせんべいをいっぱい食べました。最後、鉄をカリッと噛み砕く音が一番難しかったです。ちょっと細めの歯に近い太さの万力を買ってきて、そこにボルトやナットを挟み込んで潰した音がジャリッという音になった。」と楽しそうに



濱谷 光太郎

思い出を話す。「効果音というものは作ると思って作れる場合と事故から生まれて出来る場合があります。鉄をはね返す音は、20年前、味噌汁を作ったまま寝てしまい、焦げ臭い匂いがしているので台所に行くとお鍋が真っ赤になっていた。危ないと

思ってそれを水につけたらパチーンと弾き返したんです。この音おもしろい。それを何回もやって録音してその素材が今に残っていたんです。」濱谷氏はいつも音の事を考えている、常に録音しているという。



この濱谷氏が作った音をミキサーなどで調整する小池氏は「ここでどの音を一番聴かせるのが効果的になるか悩みますね。番組全体を通して、この部分ではセリフを一番前に一番大きくしてあげたり、ある部分では効果音を一番前に出してあげたり。」「最後に村長が歌うシーンは悲しく聴かせたかったので音量をちょっと低めに設計しました。」と語る。鳥氏が「このシーンは濱谷さんがこだわって作ったこの音を前に出したい、自分は台本を書いた立場なので、

このセリフをもっと聴かせたいからもうちよっと後ろの音を下げ、という攻め際の中で彼が、この効果音はこの周波数のこの部分だけ落としたらセリフが立ちますねとか、ちょうど音の山と山との間にセリフが入るようにずらしましょうとか、細かい調整を考えてくれるんです。」と付け加えた。また一万人の大合唱は、一度録音した15人での合唱を、改めて大きなスタジオでスピーカーから音を出し反響音をマイクで録音する。それを小池氏が何度も重ねて作り出した。

ラジオの復活

最後に石井氏が「ラジオを復活させたい。ラジオには素晴らしい番組がたくさんある。色々なラジオの楽しみ方をこのセミナーで皆さんと一緒に見つけていきたい。」と締めくくった。

■公開セミナー 第33回名作の舞台裏『なぜ君は絶望と闘えたのか』

11月23日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」が開催された。今回は、光市母子殺害事件を追ったノンフィクションを元に、2010年 WOWOW で放送された『ドラマWスペシャル なぜ君は絶望と闘えたのか』を取り上げた。

【登壇者】 眞島 秀和（出演）、門田 隆将（原作）
石橋 冠（演出）、岡野真紀子（制作）
【司 会】 渡辺 紘史（放送人の会）



第33回となる「名作の舞台裏」だが、WOWOW制作のドラマを取り上げるのは初めて。岡野氏は「この企画を通せたのは、ひとえに上層部の勇氣。ドラマ制作の歴史が浅い局

ではあるが、有料チャンネルなので純粋に“視聴者=お客様は何を見たのか”だけを考へて企画提案をしている。『なぜ君〜』は、まだ裁判が続いている中でこういうドラマを作る危険性や、題材に対する我々の覚悟などを社内でもことん話し合った上で、係争中の今こそやるべきだという判断を上層部が下してくれた」と振り返る。

原作では門田氏自身は冒頭と最後にしか登場しないが、



ドラマでは被害者遺族と並ぶもう一人の主人公として記者が登場する。その意図について岡野氏は「最初に石橋監督から『このドラマに悪人はおらず、皆それぞれの思いがある』と言われたが、本村さんを主人公にすると犯人や弁護団に対処しようとしても公平性が保てない。

そこで、あえて記者を主人公に据えることで、一歩引いた立場でこの事件を見つめようとした」と話し、門田氏も



「事件自体は事実として固定されているから、それ以外のところで色々な人が登場し、物語を広げていくのがドラマの面白さ。実話にフィクションを加えて、架空の登場人物も含め話がぐんぐん展開していく完成度と心に染み入る内容に、一視聴者として泣いてしまった」と話した。また、

「自分たちジャーナリストは、土を掘るように資料を発掘していくが、ドラマ作りは上に積み上げていく作業。違うジャンルのプロが作るものは素晴らしい」と語った。

被害者遺族を演じた眞島氏は、「最初、これはすごい台本をいただいた、絶対に途中で折れず最後までやるんだと決意したことが印象に残っている。鮮明に記憶に残っていた事件だし、本村さんは自分とも同年代の男性で、自分も闘っていかなければいけないという使命感があった」と役が決まった時の気持ちを振り返った。



岡野氏が「石橋監督に断られたらやめようと思っていた」と明かした演出の石橋氏は、「確かに難しい企画だと思った。でも岡野さんが言うとおりの、この原作が持つ熱さやテーマの大きさを、事件が風化しないうちにドラマにする勇氣も必要だと思ったし、50年ドラマを作り続けてきた今、こういう若者の勇氣に加担すべきだとも思った」と話した。スタッフ全員で、原作を一行ずつ読み込みながらその意味を精査していくという作業を重ね、叙述の行間でフィクションが入り込む余地やイメージを膨らませる箇所を探し、それをどう画や芝居にしていこうかを考えながら進めたという。「ベースはノンフィクションだが、ものすごく想像力を

使った。原作を読みながら、たとえば意見陳述の日に本村さんがこういうことを言ったということは、きっと前日こんな思いをしていたに違いない、二人の遺影を見ながらこう話しかけたに違いない、という想像をつなげて脚本を紡いでいった」と岡野氏。門田氏も「撮影の現場で、真島さんが出てこられたのを本村さん本人と間違えたくらい。真島さんは頭で覚えたセリフを言っているのではなく、胸の中からセリフが飛び出しているんだと思った。また、ドラマに登場したそれぞれの人物が、会ってもないのに石橋監督はよくここまで描けるものだなと、全員を知っている自分には驚きだった」と語り、真島氏も「セリフの量は多かったが、この作品はセリフを頭に入れる作業が大変だったということはあまりなかった」と話した。石橋氏も「演技については、役者への注文や指導という次元にこの劇はなかった。しかし、長いシーンで

もセリフのNGが出なかったのには驚いた」と振り返る。また、「危険な仕事にドキドキしながら立ち向かっていると、自分の中の子供っぽさみたいなものが出てきて、実は今見ると青臭い演出をしている部分があつて恥ずかしい」と明かした。

最後に、「俳優としてだけではなく、これから生きていく上でも何か大きなものをいただいた」とこの作品への感謝を述べた真島氏。会場では意欲的な質問も飛び交い、原作者・制作者の勇気が完成させた骨太の人間賛歌に大きな拍手を送った。



■「市川森一・上映展示会 ～夢の軌跡～」開催

■市川森一氏の“夢”の軌跡を辿る



2011年12月10日に、数々の名作ドラマを生み出した脚本家・市川森一氏が逝去してから一年を迎えるのにあたり、市川氏の業績を偲び上映展示会を開催。(2012年12月6日～2013年2月3日)

この企画展は、放送番組センター、日本放送作家協会、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムの三者共催、各放送局（NHK、TBS、日本テレビ、中部日本放送、北海道放送、テレビ長崎）、制作会社（東宝、円谷プロダクション）、及び市川氏の故郷・諫早市立諫早図書館、市川美保子氏などの協力を得て実施したもの。

市川森一氏は、1941年長崎県諫早市生まれ。1966年『快獣ブースカ』で脚本家デビュー。1978年37歳の若さでNHK大河ドラマ『黄金の日日』を執筆。1982年『淋しいのはお前だけじゃない』で第一回向田邦子賞を受賞。それ以降も、東芝日曜劇場の数々の単発ドラマ、人気サスペンス「モモ子シリーズ」や多くの連続ドラマ、大河ドラマ『山河燃ゆ』・『花の乱』などを執筆。長年、日本放送作家協会理事長を務め、「日本脚本アーカイブズ」設立運動、アジアの放送作家と制作者が集う国際会議「アジアドラマカンファレンス」も推進された。また放送番組センターの理事も務められ、放送ライブラリー事業の充実に尽力頂いた。

“夢”という言葉が数多く使われた市川作品のタイトル。『夢の鐘』『夢の指環』『面影橋・夢いちりん』『夢帰行』……。 “夢見る力”を信じた市川森一氏の ～夢の軌跡～ を伝えた。

作品紹介

デビュー作『快獣ブースカ』（1966・日本テレビ／円谷プロダクション）から、遺作となった『蝶々さん』（2011・NHK）まで市川森一氏の全作品を紹介。300を超える市川作品を5時代に分けて、年代・執筆話数・制作者・受賞歴などを記載した詳しい年譜のほか、番組写真・台本の展示で紹介。また放送評論家・鈴木嘉一氏が市川作品を7つのテーマに分けて解説した。



台本・直筆原稿、著作本

市川氏の名作ドラマの台本の数々を100冊以上展示。また諫早図書館が所蔵する貴重な直筆原稿6作品＜「林で書いた詩」（北海道放送）、「夢の標本」（北海道テレビ／MMJ）、「黄金の日日」「私が愛したウルトラセブン」「花の乱」「鏡は眠らない」（NHK）＞も紹介した。



また「メメント・モリドラマ集」などの自選シナリオ集を始め、小説「夢暦長崎奉行」「蝶々さん」「幻日」など、市川氏の全著作本（33作品・37冊）

も展示し、見ごたえのある内容となった。

愛用の品、ゆかりの品

愛用の万年筆・原稿用紙、創作ノート、直筆の“夢”の色紙、市川氏が大事にしていた快獣ブースカの人形などを展示した。

メッセージ

市川作品の出演者、プロデューサー、演出家、監督、脚本家、音楽家など、市川氏と親交のあった各界の方々53人から寄せられたメッセージを紹介。皆様からの温かいメッセージの数々に市川氏の人柄が偲ばれる。



番組上映会

放送ライブラリーで公開している市川作品（テレビ55本、ラジオ6本）の中から、テーマを決めて22作品を上映した。

会場には、メッセージを寄せて頂いた番組制作者、俳優の方を始め、市川作品のファンなどが訪れた。熱心に展示をご覧になる姿が印象的であり、何作品も続けて上映会を鑑賞する方も多く見られた。「市川森一さんの作品リストを見たくて来場しました。大変貴重な資料を見る事が出来て良かったです。」「亡くなって一年、丁度良い時期に業績を偲ぶ事が出来た。多彩な活躍を知る機会を持って良かった。」など多くの感想が寄せられている。

■出前授業を開催&BL・クリエイター支援サービス番組を追加

■出前授業



放送ライブラリーでは、平成20年から校外学習で来館する小学生向けに「出前授業」を行っている。今年度は、TBS・テレビ朝日の協力および放送文化基金の助成により、年間6回開催した。

1月10日（木）は、川崎市の公立小学校5年生105名が受講した。テレビ朝日の講師が、20年以上携わったアナウンサーの仕事について話し、またVTRを見ながらニュースができるまでについて学んだ。実際に使われたニュース原稿を使い、発声練習や原稿読み練習も行った。「アナウンサーが風邪をひいてしまったらどうするのか」という質問に対しては、「日頃からうがいをするなど、自己管理が何より大切。とはいえ、自分も声が出なくなってしまう、喉に太い注射を2本打って番組に出たこともある」と裏話を披露した。

■BL・クリエイター支援サービス

放送局の若手制作者の研修や番組企画の参考に役立ててもらうことを目的に、2012年9月から本格運用を開始した本サービスは、放送局からのアクセス限定で局内の自席のパソコンで放送ライブラリーの番組を視聴することができる。

視聴できる番組は、放送ライブラリーの公開番組の中から「ドキュメンタリー・録音構成」「教育・教養」のジャンルで、NHKならびに民放各社制作の番組。日本民間放送連盟、芸術祭賞、放送文化基金賞などの国内外賞の受賞・参加番組のほか、全国の放送局が地元のテーマや歴史・社会・出来事などに焦点をあてた秀作・力作の番組が揃っている。当初、テレビ番組671本、ラジオ番組619本でスタートした本サービスも、今年1月末現在では、テレビ番組2,536本とラジオ番組744本まで番組を増やし、合わせて3,000本を超える番組を視聴できるようになった。

昨年9月15日から12月31日までの利用状況は以下の通り。

- ◇グローバルIPアドレス登録社数 127社 / 200社 (63.5%)
- ◇利用登録者数 350人 (87社)
- ◇利用実績数
 - ・番組検索回数 1,161回
 - ・テレビ番組 番組視聴回数 346回
 - ・ラジオ番組 番組聴取回数 21回

今後も本サービスの充実を図り、利用を促進していく。

本サービスについてのお問い合わせは、当センター業務部まで（TEL:045-222-2881）

■「向こう5年間の放送番組センター事業方針」が第1回臨時理事会で決定

放送番組センターは昨年4月に公益財団法人に移行した機会に、事業の在り方を見直し、検討することとした。

村上会長を委員長とする「事業検討委員会」を24年度に設置し、4月から検討を進めて「向こう5年間の放送番組センター事業方針案」として取りまとめ、11月30日開催の平成24年度第1回臨時理事会で承認された。

「向こう5年間の放送番組センター事業方針の骨子」は次の通りである。「事業」

- ①さまざまなライブラリーが立ち上がる時代にあって、放送事業者の手による放送ライブラリーの独自性や特色を発揮し、存在感を高める。
- ②公益財団法人として課せられた事業の全国展開を実現する。横浜の放送ライブラリー以外の各地の施設で番組視聴ができるように

すると共に、イベント等の事業の地方展開に積極的に取り組む。

③期待の大きい大学の授業での放送番組の活用など、教育現場での利活用を一層推進する。

④厳しい財政事情の中で、事業の選択と集中を図り、公益財団法人として優先度の高い事業を確実に遂行する。

「財政」

⑤NHKと民放各社による出損は、今後段階的に削減し、25年度に10%、27年度に30%削減し、総額でおよそ1億6千万円の支援規模とする。

⑥脆弱な財政基盤の解消に向けて、基金運用益の改善、賛助金の拡充に取り組むとともに、一層の経費節減に努め、必要な予算を確保する。

【放送番組センターレポート】は事業の現況をお知らせする内容で、年間4回発行する放送番組センターの機関紙です。